

『衣笠内府歌難詞』からみる言語感覚

山本 智穂

『衣笠内府歌難詞』は、藤原定家著の『衣笠内府歌難詞中納言入道殿』『粟田口大納言基良卿許被注遣之草』『名所百首歌之時与家隆卿内談事』の三つの消息からなる歌論書である。最初に収められている『衣笠内府歌難詞』を総称として石田吉貞氏が使用したゆえにそう呼ばれている。

『衣笠内府歌難詞』について、石田吉貞氏は『藤原定家の研究^①』の中で、成立年代を「だいたい承久以前」で「粟田口大納言のものとさしてかわらない」と述べているが、久保田淳氏は『歌論集(一) 中世の文学』に収められている『衣笠内府歌難詞』解題において、成立年代は「さだかではない」としている。また、『粟田口大納言基良卿許被注遣之草』については、家隆と範宗の歌を作った年代から承久元年といわれている。『名所百首歌之時与家隆卿内談事』については、『明月記』の記述から建保三年九月二十四日頃と判明している。

伝本は、①宮内庁書陵部蔵『衣笠内府歌難詞』(函架番号150・586)の書陵部本、②冷泉家時雨亭文庫蔵『衣笠内府歌難詞』の時雨亭文庫本の二本が確認されているが、①は②を書写した本である^④。

『衣笠内府歌難詞』は様々な人に書き送った消息より成る歌論書であるため、一語単位から一首単位まで幅広い、

定家の和歌実作における注意事項や和歌解釈における疑問点をうかがい知ることができる。本稿では、この注意事項や和歌解釈における疑問点を契機として定家の言語表現を考察する。⁽³⁾

二

『衣笠内府歌難詞中納言入道殿』の本文において「此詞自他雖非不詠事候打解詞候」として「わが物がほ」がある。久保田氏は「わが物がほ」について、頭注で「いかにも自分のものだというような顔つき、態度。(中略)「打解ケタル詞」とは、日常語であつて、歌語でないということ。」と述べている。定家は、『衣笠内府歌難詞中納言入道殿』において「わが物がほ」は「自分も他人も詠まないこともないが日常語である」と考えているといえよう。この表現から考えてみたい。

そもそも、『八雲御抄』⁽⁶⁾において述べられるように、和歌には優美な詞を使用せねばならない。

寂蓮法師がいひけるは、「歌のやうにいみじき物なし。ゐのしゝなどいふおそろしき物も、ふするの床などいひつれば、やさしき也」といふ。ましてやさしきものをおそろしげにいひなす、無下の事也。

『毎月抄』⁽⁷⁾においても次のような記述がある。

すべてよむまじき姿・詞といふは、あまりに俗に近く、また恐ろしげなるたぐひを申し侍るべし。(中略)げに
いかに恐ろしき物なれども。歌によみつれば優に聞きなざるたぐひぞ侍る。

従つて、優美な言葉を使用すべき和歌においては、「打解ケ」ている言葉は本来使用すべきではなく、「わが物がほ」は歌語としては不適切な言葉といえ、定家は「歌に詠み込むことはあまり良くない」と考えているといえよう。

「わが物がほ」即ち「くがほ」のような表現については、『源氏物語』、『狭衣物語』⁽⁸⁾など多くに見られ、国語学的な観点からは、基本的に動詞の連用形に下接し、中世に入ることにつれて接続の仕方が多様化していることが言われて

いる。さらに、和歌においては、西行の和歌に多く使われていることが注目されてきた。^⑨ 稲田利徳氏は『西行の和歌の世界』^⑩の中で次のように述べられている。

西行の和歌には「くがほ」の表現が少なからずあることと、これが西行の和歌表現の特色の一つであることは、多くの西行研究者の等しく認めるところである。(中略)この表現は、特に西行に限ったものではなく、和泉式部や俊恵など、数量的にみても西行をうわまわるものもあることが明確になった。一方、この表現は俊成などによって、晴の歌合などには詠出すべきものではないと批難されているが、実際、歌合資料に当たってみると、平安朝の歌合にもかなりよまれ、勅撰集などにも相当入集している事実もおさえることもできた。

このようななかで、西行の歌を位置付けてみると、ほとんどが擬人法であること、また、詠歌主体と「くがほ」の主体とが緊密に結びついている歌の多いことが特色としてあげうるであろう。

また、稲田氏は定家の「くがほ」表現についても触れられ、家集に何首入っているかを示している。

「拾遺愚草」(定家) (二九八五首) ↓十七首 (五〇八・五二九・八六九・九七六・一一一・一三五七・一三九三・一五三七・一六一五・一七五二・一八五九・一八八三・一九八八・二〇二六・二〇八一・二三三九・二七七六)

この調査結果をみると、新風を推進した新古今時代の歌人も西行に近いほど、この表現を使用していたことがわかる。(後略)

しかし、稲田氏の論文は一九八一年のものであり、現在調査すると『拾遺愚草』における「くがほ」表現は二十七首存在する。

そして、定家が「くがほ」表現として使用した語彙は全部で二十一語存在する。

見せがほ (五〇八、二三三九)・わかれがほ (五二九)・色がほ (八四二、員外六二)・かたみがほ (八六九、一三九三)・とひがほ (九七六)・もよほしがほ (一一一)・きほひがほ (二三五七)・わが竹がほ (二五〇五)・ぬるるがほ (二五三七、一八五九)・ありがほ (一六一五、員外五〇六)・ならはずがほ (一七〇〇)・われとひがほ (一七五二)・しりがほ (一八八三)・やどがほ (一九八八)・しるべがほ (二〇二六)・しる人がほ (二〇八二)・友がほ (二二一六、員外三四八)・(時は) わきがほ (二七七六)・我が物がほ (員外九九)・まさりがほ (員外五二八)・おりしりがほ (員外五八七)

年代不明	年代	歳	入集	歌番号
寛喜元年 (12229)	文治五年 (1189)	二八歳	重奏和率百首	五〇八・五二九
嘉祿元年 (12225)	文治五年 (1189)	二八歳	女御入内御屏風歌	一八八三
年代不明	建久元年 (1190)	二九歳	建久元年一字百首	員外六一・員外九九
承久二年 (1220)	建久三年 (1192)	三一歳	建久三年九月十三日夜	員外三四八
承久元年 (1219)	建久四年 (1193)	三二歳	六百番歌合	八四二・八六九
承久二年 (1220)	建久四年 (1193)	三二歳	建久四年九月一日の詠	二七七六
承久元年 (1219)	建久七年 (1196)	三五歳	百二十八首和歌	一六一五・一七〇〇
承久二年 (1220)	建久九年 (1198)	三七歳	仁和寺宮五十首	一七五二
承久元年 (1219)	正治二年 (1200)	三九歳	院初度百首	九七六
承久二年 (1220)	建仁元年 (1201)	四〇歳	院句題五十首	一八五九
建保三年 (1215)	建保二年 (1214)	五三歳	建保二年八月十六日歌合	二三三九
建保四年 (1216)	建保三年 (1215)	五四歳	内裏名所百首	二〇一一
建保六年 (1218)	建保四年 (1216)	五五歳	春日同詠百首	一三五七・一三九三
承久元年 (1219)	建保六年 (1218)	五七歳	文集百首	五〇六
承久二年 (1220)	承久元年 (1219)	五八歳か	仁和寺宮五十首	二〇二六
年代不明	承久二年 (1220)	五九歳	四季題百首	員外五一八・員外五八七
嘉祿元年 (1225)	承久二年 (1220)	六〇歳頃か	藤川百首	一五〇五・一五三七
寛喜元年 (1229)	嘉祿元年 (1225)	六四歳	権大納言家三十首	二〇八一
年代不明	寛喜元年 (1229)	六八歳	女御入内屏風和歌	二一一六
年代不明	寛喜元年 (1229)	六八歳	詠花鳥和歌	一九八八

この二十一語は三回以上使用されているものが存在しない。このことから、定家は一つの気に入った表現を見出したものではなく、新たな表現を探し求め、様々な詞を詠み試みていたのであるうと思われる。

また、それぞれの作成年代を見ると、特に二十代後半から三十代前半と五十代全体を通して詠んでいることがわかる。年号でいえば建久年間と建保年間において、詞の可能性を求め続けた、その一例といえるのではないだろうか。

さらに、次の表は定家の「くがほ」表現の中でも、特殊で他者の追隨例もほとんどないものである。

語句	定家詠	他者の詠
きほひがほ	拾遺愚草一三五七（夫木抄六四八七、歌枕名寄六〇六六）	鈴屋集二一五
わが竹がほ	拾遺愚草一五〇五（藤川五百首鈔二一）	拳白集一八〇七
ならはずがほ	拾遺愚草一七〇〇	拾玉集二五四
われとひがほ	拾遺愚草一七五二（御室五十首五二二）	耕雲千首五一五
友がほ	拾遺愚草二一一六 拾遺愚草員外三四八	六百番歌合九八（遊糸・藤原隆信） 出観集（夫木抄五一九）
（時は）わきがほ	拾遺愚草二七七六（拾玉集五三六九）	
いろがほ	拾遺愚草八四二（夫木抄六五一四、六百番歌合五〇三） 拾遺愚草員外六一（夫木抄七六四二）	為家千首五一三

他者の詠を見てみると、「友がほ」のみ二首あるが、あとは一首もしくは該当なしである。

また、定家の歌以外では、ほとんど使用されない「くがほ」の表現は「きほひがほ」「わが竹がほ」をはじめ、表に示したように七語ある。例えば、「我が」＋「竹」、「我」＋「問ひ」、「時は」＋「わき」¹³⁾などと和歌においては非常に珍しい造語を「かほ」の上に冠している。

稲田氏が『西行の和歌の世界』で指摘された、西行の「くがほ」表現を持つ和歌と比較すると、西行は「かほ」の上に動詞、形容詞が一語接続している場合がほとんどである。例えば、「言ひがほ」「みせがほ」「ぬるるがほ」「かちがほ」「うれしがほ」などがある。また、「影もちがほ」や「我がものがほ」などと語を接続し、より長い一語を形成しているものも存在はする。

定家は西行に比べ、長い一語が多く、「我が」＋「竹」のように語の接続が珍しいものが存在する。このことから、「くがほ」を、定家は意図的に新しい表現で創作したと考えられる。¹⁴⁾

定家は「「分解けたる詞」と家良に述べているが、彼の「くがほ」表現の和歌を通覧すると、自らは使用しているのみならず更に新しい和歌表現を追い求めて、新しい語のつながりを詠んでいたことがうかがえる。

弟子への指導である『衣笠内府歌難詞』では、相手の力量を勘案して個別に使用法を教えるため「がほ」表現即ち「日常的情景（俗なもの）」を諫めていたが、自らが詠み出だす和歌では、表現の可能性を求めて、果敢に挑んでいるのである。

三

『名所百首哥之時與家隆卿内談事』において「あまのかぐ山 いつかは時をわすれ草」を「此事堅固不覺候。必可承候。」と定家は記している。久保田氏は、当該箇所を「内裏名所百首の「天香具山」の題で家隆の詠んだ、「夏衣いつかは時を忘れ草ひも夕暮の天の香具山」の歌を指す。」と注する⁽¹⁵⁾。確かにこの歌のことであり、定家は家隆のこの和歌の発想が分からないから家隆に質問したい、と述べている。この点を考えたい。

さて、定家が『内裏名所百首』において重要な役割を果たしていることは、「自内、名所百首可注由、蒙綸言、仍書進之、本歌有名歌之跡所々也」という建保三年九月十日の条、「名所歌^{先五、十首}、以少将令清書、進上禁裏了、愚詠進上事、天气快然、人々对捍無興之処、詠進之上、早速、悦思食之由、有仰事」同年九月二十三日の条、「左中将・讚岐国司・前宮内行能・前丹波知家朝臣・藏人判官康光、各送五十首歌、雖似人望、老眼之苦耳」同年九月二十四日の条などの『明月記』⁽¹⁸⁾の記述から読み解くことができる。即ち、十日に順徳院へ名所の古歌を進上し⁽¹⁹⁾、二十三日に定家自身が名所歌五十首の提出を行い順徳院に喜ばれ、二十四日に定家が各歌人の五十首に目を通していることがわかる。

『内裏名所百首』⁽²⁰⁾を見てみると、夏十首「天香久山 大和」という題で、家隆の歌は同題の中では七番目に当たると三〇七番歌であった。

- 三〇一 白妙の衣ほすてふ夏の日の空にみえけるあまのかぐ山
 三〇二 吹く風は五月雨はれぬ久かたのあまのかぐ山衣かはかす
 三〇三 五月雨はあまのかぐ山空とちて雲ぞかかれる嶺のまさかき
 三〇四 五月雨はあまのかぐ山おしこめて雲のいづこに在明の月
 三〇五 さみだれのをやむ晴間の日影にも猶雲深し天のかぐ山
 三〇六 夏くれば霞の衣たちかへて白妙にほす天のかぐ山
 三〇七 夏衣いつかは時をわすれ草日も夕暮のあまのかぐ山
 三〇八 見わたせばあさたつ雲の夏衣空にほしける天のかぐ山
 三〇九 ほととぎすなく一声や過ぎぬらんいまぞ明行くあまのかぐ山
 三一一 さか木ばに夏の色とやさだめをきし緑ぞふかき天のかぐ山
 三一一 夏のよの雲にははやく行月のあくるほどなきあまのかぐ山
 三一二 夏のよの在明の空の月影に雲はのこらぬあまのかぐ山

「天の香久山」は歌論書や歌字書において、「古歌詞」や「万葉名所」など古くから使用されるものとして登場する。「奥義抄」には「出万葉名集名所 普通名所不注 大和 あまのかぐ山」とあり、『和歌色葉』には「又國々の中に所々の名あり。ふるくよりみな人のよみおき、きくなれたるは 山 あまのかぐ山」や「萬葉集所名 山 あまのかぐやま」と記されている。また、『八雲御抄』名所部、山には、「あまのかぐ同天の香具」（あまの石戸をおしひらき給所也。か鹿香ご山とも。久方の――。わすれ草。霞。雲、「鹿具山とも」衣ほす。神鏡奉_鹿鑄所也。みねのまさかき_{真神}。俊成歌也。あまのかぐ山はあまりにたかくて、そらのかのかえくるによりていふと日本紀二見えたりと云り。）とあることから万葉の頃から既に詠まれている言葉として歌字書に引用されていることがわかつた。

「忘れ草」は『能因歌枕』により「萱草」であることが知られている。また、万葉集以来の歌ことばとされている

ことは、『和歌色葉』「八難歌會釋者」において、

萬葉古歌に付伊勢物語百十三首あり。(中略) 四十一 わすれぐさ(中略)

四十一 わすれ草かきもしみゝにうゑたれどおにのしこ草なほこひにけり

わすれ草は萱草なり。兼名苑には忘憂草とかけり。鬼のしこ草とは紫苑なり。物わすれせずといへり。わすれ草の一名をばしのぶ草といへり。屋の軒、住吉のきしなどに生ふとよめり。二條後の御方よりわすれ草をばしのぶ草といふとて、つかはしたりければ、在五中将のよめりける歌

わすれぐさ生ふる野べとはみゆらめどこはしのぶなり後もたのまむ

といひ入れけりと伊勢物語にみえたり。

と、あることからわかり、「憂き事を忘れる草」即ち「恋」などに関するものとして使用されていたことがわかった。

しかしながら、『内裏名所百首』において「天の香具山」題で詠まれている家隆の歌が「恋」を象徴させるような「忘れ草」を詠み込んでいることは珍しい。

また、当該歌に非常に似ている歌が『歌枕名寄』に存在する。

君にわがつけしころや忘れ草日もゆふぐれのあまのかぐ山(香具山/家隆/二九三九)

こちらの家隆の作とされることから、異伝歌であろう。この歌は恋の歌である。

ところで「藤原家隆の本歌取りに関する調査と研究(二)―第一部家隆の本歌取り一覧(下)―」⁽²³⁾において、西畑実氏は「春過ぎて夏きにけらししろたへの衣ほすてふ天のかぐ山(持統天皇)」を本歌とする家隆の歌が四首あると指摘されている。その四首は次の通りである。

いまよりはあきかぜたちぬしろたへのころもふさほせあまのかぐやま(建暦二年九月二十八日内裏秋十首)

なつごろもいつかはときをわすれぐさひもゆふぐれのあまのかぐやま(建保三年十一月頃内裏名所百首)

しろたへのころもほすてふ山がつかきつのは日かげやはさす(嘉禄元年道助法親王家十首)

春ををしみあまのかぐやま袖ぬれぬあすはうづぎのころもほすとも（落素百首）

当該歌は二番目に出されているが、当該歌は他の三首に比べて次の歌の方がより関係が深い歌のように思われる。

忘れ草我が紐に付く香久山の古りにし里を忘れんがため（萬葉集三／三三四／大伴旅人）

家隆と同じく旅人の和歌は「忘れ草」「紐（日も）」「香具山」の言葉が入っている。

家隆が参考、もしくは着想を得たのは持統天皇の和歌ではなく、旅人の和歌ではないだろうか。⁽²⁴⁾『歌枕名寄』にお

いて当該歌は二九三九として入集されており、二九三八には「わすれ草わがひもにつくかぐ山のふりにし里のわすれ
じがため」が「万三 萱草 古郷」として入集している。二九三八は作者名がないがこれは旅人の歌と考えられる。

このことから、『歌枕名寄』を編んだ後代の人物は少なくとも家隆と旅人の歌に何らかの関係性があると考えていた
ことがうかがえる。こうした点からも、望郷の心を恋の思いになぞらえたというのが旅人の和歌で、夏の夕暮に思い
を馳せる心を恋の思いになぞらえたのが家隆の和歌といえるのではないだろうか。

では、定家自身は「天の香具山」を詠むときにどのように詠んでいたのか。

彼の「天香具山」を詠み込んだ和歌は、二首しか管見に入らない。家隆と同じく内裏名所百首で詠んだ一二二六で
は、

『拾遺愚草』

一二二六 五月雨はあまのかぐ山空とちて雲ぞかかれる峰のまさかき（内裏百首／夏十首／天香具山）

二一五八 花ざかり霞の衣ほころびて峰白妙のあまのかぐ山

（部類歌／春／建仁二年三月、三体とかやおほせられてめされし、春歌）

家隆と同じく内裏名所百首で詠んだ『拾遺愚草』一二二六では俊成の歌「雪降れば峯の真禰埋もれて月にみがける
天の香久山」⁽²⁵⁾を参考にしており、二一五八に関しては持統天皇の「はるすぎてなつきたるらしるたへのころもほし
たりあめのかぐやま」⁽²⁶⁾の影響があると考えられる。定家歌は「霞の衣」が「香具山の峰」に掛かる「白妙」のよう

だ、といっているが、「霞」と「白妙」を詠み込んだ和歌は定家以前に六首（重複歌を除くと四首）しかなく、この内、「白妙のゆきに霞もみよしののかさねてけふや立ちはじむらん」（海人手古良集／一）以外はすべて長歌である。しかし、海人手古良集は「白妙」を「雪」に見立て、「御吉野」が「雪によって霞」と述べており、定家の発想とは違う。定家は「香具山歌」即ち「旅人歌」という認識がなかったため、家隆の発想のような語句の使い方に気が付かず、「此事堅固不覺候。必可承候」といったのであろう。

四

『名所百首哥之時與家隆卿内談事』において「さかきとりかけしみむろのますかゞみ 見及びたる心地もし候はず。」とある。この本文中の引用歌は、家隆の『内裏名所百首』四六三番歌「さか木とりかけしみむろのますかがみ その山のはと月もくもらず」であり、この和歌に対して「見及たる心地もし候はず」とし、「今までに見たこともないものである」と定家は言っている。この点について考えてみたい。

この歌『新勅撰和歌集』巻九、神祇、五五四番歌として入集していることから、『新勅撰和歌集』撰進時の定家の評価は高かった、といえる。

以下に『内裏名所百首』の「三室山 山城」を挙げる。

四五七 みむろ山神のいがきにはふくずのうら吹きかへす秋の夕かぜ

四五八 かねてだにうつろひそめしみむろ山下草かけて時雨ふる比

四五九 みむろ山しぐれもやらぬ雲の色ののれうつろふ秋の夕ぐれ

四六〇 神なびのみむろの山のさか木ばのかはらぬ色にかはる秋風

四六一 三室山ふもとのをばな霜がれて嵐のそこよわる虫の音

四六二 神なびのみむろのさか木そのみや残るもしるき秋のみぢば

四六三 さか木とりかけしみむろのます鏡その山のはと月もくもらず

四六四 吹ままに木の葉やたへぬ神なびのみむろの山に残る秋かぜ

四六五 ちらすなよ秋のはもりの神がぎのみむろの山は嵐吹くとも

四六六 よそにやはちる紅葉ばをみむろ山秋行く袖を吹く嵐かな

四六七 みむろ山木のはも色やいそぐらんわが袖のみの時雨ならずは

四六八 三室山神もしるらむ君が代に草葉ももれぬ露のめぐみ⁽²⁷⁾を

「天の香久山」と同様に「三室山」も伝統的言葉であることは歌論書や歌学書から知られる。

『奥義抄』には「出萬葉集所名 普通名所注不 大和 みむろ山⁽²⁸⁾」とあり、『和歌初学抄』には「所名 山大和 みむろ山

神ノミムロニソフ」とされ「兩所ヲ詠歌 山 萬葉 みむろなるみわやまみればかくらくのはつせのひばらおもほゆ

るかな」とある。また、『和歌色葉』には「又國々の中に所々の名あり。ふるくよりみな人のよみおき、きゝなれた

るは 山 みむろ山」とある。これらのことから万葉の頃から既に詠まれている言葉として歌学書に引用されている

ことがわかる。

「三室山」は「たつた河もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし」（古今集／よみ人しらず／二八四）「あ

らしふくみむろの山のみぢばはたつたのかはのにしきなりけり」（後拾遺和歌集／秋下／永承四年内裏歌合によめ

る／能因法師／三六六）などから「神」に関することや「紅葉」に関する語句を一緒に詠み込むことが多い。

こうした状況を反映して、『内裏名所百首』では、家隆の四六三番歌以外は、神に関することや「時雨」や「紅

葉」、「虫の音」などがはっきりと記されている。その点当該歌は、「月」に「鏡」を見立てており、独自の発想が表

れている。

岩崎禮太郎氏は、「名所和歌における独創性と歌人的特色―建保期を中心として―」⁽²⁹⁾において、⁽³⁰⁾

③さかきとりかけし三室のます鏡その山のはと月も曇らず (新勅撰・神祇・入集)

(参考歌) 千載・秋上・基俊「山の端にますみの鏡かけたりとみゆるは月の出づるなりけり」

と詠んで「ます鏡」を詠み入れていることに注目される。この家隆の歌は、定家が「最勝四天王院障子和歌」の

二見浦」の歌において、

ます鏡二見の浦にみがかれて神がきぎよき夏の夜の月

と詠んでいるのに影響を受けたのかもしれない。

と述べられている。

岩崎氏は参考歌として『千載和歌集』二八七番の藤原基俊の和歌を挙げられている。

山の端にますみの鏡かけたりとみゆるは月の出づるなりけり (千載・秋上・基俊)

しかし、定家が「見及たる心地もし候はず」と家隆の和歌を評したのは、基俊の和歌と「ますみの鏡 (ます鏡)」

と「山の端」、「月」が共通するとしても、類似の和歌とは考えなかつたということであろう。つまり、基俊の和歌に

ない部分を定家は家隆の和歌に見出し評価したと考えられよう。一つの可能性として、定家が基俊のこの和歌を見落

としていたと考えることもできるが、定家が『千載和歌集』に入っている和歌を見落すとは考えにくい。

次に、岩崎氏は、定家の「ます鏡二見の浦にみがかれて神がきぎよき夏の夜の月」に影響を受けたかもしれない、

と述べられている。だが、もし定家の歌から着想を得ているのであれば基俊の和歌と同様、「見及たる心地もし候は

す」ということがあるだろうか。

では、家隆の着想や語彙使用の感覚はどこからきたものであろうか。また、岩崎氏は同論において、

②ちはやぶる神のみむろのます鏡かけていく夜のかげをこふらむ (続千載・神祇・入集)

(参考歌) 万葉・巻十四・三四六八「山鳥の尾ろの初麻に鏡懸け唱ふべみこそ汝に寄そりけめ」(中略)

家隆は特に建保期以来、万葉集の歌を本歌とする歌を多く詠んでいる。さきに(参考歌)としてあげた万葉集の

「山鳥の尾ろの初麻に鏡かけ……」の歌に接した家隆は、鏡をかけて神を祭ることと「御室山」とを結びつけて②の歌を詠み、次に「御室山」の「ますみの鏡」と、自己の好みである清澄な月とを関連づけた③（稿者注…既に引用した「さかきとりかけし三室の」の歌）の歌を詠み、更にその境地を愛する心を持ち続け、その後④の歌やその次に揚げた「山どりのはつをのあきのみすかがみ……」の歌を詠んだのであろう。その独自性には注目すべきものがある^③。

と述べられている。

『内裏名所百首』は建保三年十月廿四日に行われたものであるため、家隆が万葉集の歌を本歌としたと、岩崎氏が考察された②③④の関連性は妥当なものであると考える。

しかし、『萬葉集全歌講義（巻第十三・巻第十四）第七卷』^④「山鳥の……」の和歌の歌意において、「初麻に鏡を掛けて唱える」儀礼を、祝婚の祭儀とみる説（全訳注）、「アサの収穫を祝う家の祭りであろう」（全注釈）説などがある。後者は、家の祭りを行うのは女の役目だからという。」と紹介されている。語釈においては「初麻に鏡掛け」「初麻」は、その年に初めて収穫した麻。初麻に鏡を掛けるのは神祭りの儀礼。麻も鏡も神への捧げもの。」とある。このことから、「鏡をかける」という意味が神祇に関わるものであり万葉集以来のものである。そこから、岩崎氏の「山鳥の……」と「御室山」を結びつけたのではないかという解釈が出ると考えられる。

また、成立年不明の『内裏名所百首注』^⑤においても、当該歌を「昔は神の社をは室と申也歌の心は御室山の神祭禊に鏡をかけて舞遊ふと也今はさもなければ月も鏡として雲らすと読めり其山のはとは昔は鏡今は月影をくもらすまもれとなり」と記述する部分がある。

それ故、三室山においても何らかのお祭りが行われていたという伝承が家隆の頃に伝わっていたということも考えうるかもしれない。そうであるのなら、『万葉集』の「山鳥の……」の和歌が神祇に関することであり、そこから家隆が着想を得たということもできよう。

しかし、それに比較して田村柳菴氏は『定家物語』再吟味―定家の著作として読解する試み⁽³⁴⁾―において、「祝部らが齋ふ三詣の真澄鏡懸けてぞ惣ぶ逢ふ人ごと」に「さかきとりかけしみむるのますかゝみ」の本歌であると述べている。

また、「家隆の万葉受容―歌枕を通してみる⁽³⁵⁾」において、松井律子氏も、「家隆の万葉享受が最も顕著な百首歌は家隆（五七歳）の「光明峯寺撰政治家百首」（内大臣家百首とも）と「洞院撰政治家百首」（七三歳）である。」と述べている。この『光明峯寺撰政治家百首』は建保三年九月のことであり、『内裏名所百首』と同年のことである。このことから、家隆は『内裏名所百首』においても万葉撰取をしていることが予想された。また、同論において松井氏は家隆が万葉受容した歌枕を表にしており、『光明峯寺撰政治家百首』において「三室のます鏡」が挙げられている。

・ちはやぶる神のみ室のます鏡かけていく世のかけを恋ふらん

（壬二集／光明峯寺入道撰政治家百首／恋／寄名所／六七二）

・はふりらがいつくみもろのまそかがみかけてしのひつあふひとごと（万葉集／寄物陳思／二九八一）

『万葉集』二九八一で使用している歌枕を壬二集六七二で使用しているという意味で挙げられていると思われる。⁽³⁶⁾

田村・松井氏は家隆の和歌と同じ言葉を持つ和歌を挙げており、それゆえ、家隆の当該歌に対する影響は、言葉の取り合わせなどから田村・松井氏の挙げる万葉集二九八一の歌の方が岩崎氏の挙げる基俊の歌より近いと考える。では、定家は「三室」をどのように詠んだのだろうか。

『拾遺愚草』

- 一四九 神なびのみむろの山のいかならむ時雨もと行く秋の暮かな（二見浦百首／秋廿首）
- 一三三九 みむろ山しぐれもやらぬ雲の色のおのれうつるふ秋の夕暮（内裏百首／秋廿首／三室山）
- 一四三八 時雨れつつ袖だにほさぬ秋の日にさこそ三室の山はそむらめ（関白左大臣家百首／紅葉）
- 一五〇〇 ひさにふる三室の山の櫛はぞ月日はゆけど色もかはらぬ（関白左大臣家百首／祝）
- 一七六八 うごきなき君がみむろの山水にいく千世法のすゑをむすばん（仁和寺宮五十首／祝）

- 一八一六 神さびていはふみむろの年ふりて猶ゆふかくる松の白雪（院五十首／冬）
 二二四六 あきの嵐一葉をしめみむろ山ゆるす時雨の染めつくすまで（正治二年九月院初度百首／山嵐）
 二五七五 神なびのみむろの山の山風のつてにもとはぬ人ぞ恋しき（恋／かたおもひ）
 二七四二 今朝そこの山のかひあるみむろ山たえせぬ道の跡を尋ねて（雑／寄山朝）
 二九二四 神がきやけふの空さへゆふかけてみむろの山のさか木ばのこゑ（雑／夕神楽）
 『拾遺愚草員外』
 八一 うつろはむ色をかぎりにみむろ山時雨もしらぬ世をたのむかな（一字百首／恋）
 三七〇 おのれのみ秋をばよそにみむろ山岩むす苔に時雨ふれども（雑）
 七〇六 あさまだき霧はこめねどみむろ山秋のほのかにたちけるかな（堀河題百首／秋廿首）

『拾遺愚草』・『拾遺愚草員外』において、定家が「三室」を詠み込んだ歌は管見では全部で十三首存在する。³⁷⁾

定家の歌には『内裏名所百首』において家隆以外の詠者が詠んでいたように「三室」で詠まれる句である「時雨」や「神南備」が目立ち、夜的情景や月の情景は見当たらず、定家歌と家隆歌の違いは「月」の存在が大きいといえよう。

五

本稿では定家の言語感覚を、『衣笠内府歌難詞』の内容を吟味することによって捉えんとしてきた。

まず「わが物がほ」此詞自他雖非不詠事候打解詞候」から、定家と「くがほ」表現を考えた。西行の和歌で「くがほ」表現を論じた稲田氏が『拾遺愚草』における「くがほ」表現を論じ、稿者も新たに調べ直した。その結果、定家には三回以上使用した語彙がないことから一つの気に入った表現を見出したのではなく、新たな表現を求め続けたと考えられることがわかった。さらに定家は「我が」＋「竹」のように和歌においては珍しい造語を「かほ」の上冠し、長い一語を形成することがわかった。つまり定家は弟子の家良に対する指導書である『衣笠内府歌難詞』におい

ては力量を勘案し諫め、自らは新しい表現を求めて「俗な詞」を取って使用していることがわかった。

続いて定家の発言二つについて考察した。

『内裏名所百首』に詠出した家隆の歌は、天の香具山歌では「忘れ草」「天の香具山」、三室山歌では「三室」「鏡」などの語句から万葉歌を本歌とすると考えられた。このため、この二つの歌は、確かに建保期において、家隆が万葉歌を享受し使用して和歌を詠んでいた例といえよう。

以上の部分以外に、定家は『名所百首歌之時與家隆卿内談事』において、家隆の和歌を称賛している。例えば、「白川關と 御詠にも能因法しが／候はぬこそうれしく候へ」という部分である。これは、家隆の内裏名所百首「白川の関の白地の唐錦月に吹きしく夜半の木枯らし」の歌が、著名な能因の歌「都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の関」（建保名所百首／秋二十首／白河関陸奥国／五五九）の表現を使用していないことを喜ばしいとしたものである。³⁸⁾

定家も同題において「白河の関の関守いさむともしぐるる秋の色はとまらじ」（建保名所百首／秋二十首／白河関陸奥国／五五五）と、能因法師と違う詠みぶりをしている。能因法師の当該歌は和歌説話³⁹⁾としても著名であり、「白河関」を詠むにあたり、人々が能因法師の歌を参考として想起する可能性は他の歌よりも高かったといえよう。定家は「順徳院御百首」「裏書」において「元久之比以後、世間哥仙不論初学旧老、詠哥一向白き青き嵐ふく也吹嵐哉、此外哥不候」・「名所百首歌之時与家隆卿内談事」において「御詠にも能因法しが／候はぬこそうれしく候へ」と述べていることから、元久く建保三年に確かに模倣の風潮を憂いていたことがわかった。まさしく定家の家隆に対する「似ていないから良い」という称賛は、「模倣を憂いている」という考えと一致する発言といえる。これらのことから、定家は万葉の表現を享受し使用しながらも、家隆の表現に着目しさらに新たな表現を求め続けるという和歌観を持っていたといえる。

資料一…「かほ」表現二七首

『拾遺愚草』

- 五〇八 植ゑおきし昔を人に見せがほにはるかになびく青柳の糸（重奉和早率百首／春）
 五二九 夜もすがら花橘を吹く風にわかれがほなる暁のそで（重奉和早率百首／夏）
 八四二 しら菊のちらぬほのこる色がほに春は風をもうらみけるかな（歌合百首／冬／残菊）
 八六九 恋ひわびてわれとながめし夕暮もなるれば人のかたみがほなる（歌合百首／恋／夕恋）
 九七六 暁はわかるる袖をとひがほに山下風も露こぼるなり（秋日侍太上皇仙洞同百首応製和歌／恋十首）
 一二一 しまがまやうらみてわたる雁がねをもよほしがほに帰る浪かな（初冬同詠百首和歌／春廿首／鹽籠浦）
 一三五七 かぜさむみほのうらわをこぐ舟に山の木の葉のきほひがほなる（春日同詠百首応製和歌／冬十五首）
 一三九三 浪枕はま風しるくやどる月袖のわかれのかた見がほなる（春日同詠百首和歌／雑十五首）
 一五〇五 山がつのそのふにちかくふしなれてわが竹がほにいこふ鶯（関白左大臣家百首／春／隣家竹鶯）
 一五三七 袖ちかき色やみどりの松風にぬるるがほなる月ぞ少き（関白左大臣家百首／秋／松間夜月）
 一六一五 あさ露のしらぬ玉のをありがほに萩うゑおかむ春の籬に（韻歌／春）
 一七〇〇 滝の音にあらし吹きそふ明がたはならずがほに夢ぞ驚く（韻歌／山家）
 一七五二 秋風にわびて玉ちる袖の上をわれとひがほにやどる月かな（仁和寺宮五十首／秋十二首）
 一八五九 秋の月（忘却又詠）袖になれにし影ながらぬるるがほなる布引の滝（院句題五十首／月照瀧水）
 一八八三 里わかぬ春の光をしりがほにやどを尋てきある鶯（女御入内御屏風歌／二月／花中鶯ある所人家あり）
 一九八八 郭公なくやき月のやどがほにかならず匂ふ軒のたちばな（詠花鳥和歌／五月蘆橋）
 二〇二六 こぎかへるたなしを舟おなじ江にもえて螢のしるべがほなる（仁和寺宮五十首／夏七首／江螢）
 二〇八一 こぎよせてとまるとまりの松風をしるる人がほにいそぐ暮かな（権大納言家三十首／旅泊）
 二一一六 淡路島ゆききの舟の友がほにかよひなれたる浦千鳥かな（寛喜元年十一月女御入内御屏風和歌／十月／千鳥）
 二二三九 をさまれる民のくさばをみせがほになびく田のものの秋の初かせ（部類歌／秋／内裏秋十五首歌合秋風）
 二七七六 はつ霜よなれのみ時はわきがほに人はかぞへぬ秋の暮かは（部類歌／雑／無常／三位中将なくなりての秋、ははの思ひにてこもりゐたる九月尽日、山座主にたてまつる）

『拾遺愚草員外』

六一 のこりなく暮れぬるとしの色がほにひと葉くもらぬ冬（冬／建久元年一字百首）

九九 心とて我が物がほにためてもつひのすみかの行へやはしる（雑／建久元年一字百首）

三四八 こゑよわるむしの鳴くねの友がほに風もすくなきならの葉がしは

（建久三年九月十三夜、左大将殿にまゐりたりしかば、にはかに人人めしにつかはして、いまこんといひしばかりに、といふ歌をかみにおきてよませられしに、これらはかきとどむべき物にもあらねど、筆をだにそめあへぬみだれがはしさもなかなかやうかはりてやとて）

五〇六 おほ空にただよふほどもありがほにうかべるちりをなにかはらはん

（法門五首／此身何足恋、万劫煩惱根、此身何足厭、一聚虚空塵）

五二八 冬の木の霜もたまらず吹くかぜに星の光ぞまさりがほなる（詠百首和歌／四季神祇／風）

五八七 霞たつみねのさわらびこればかりおりしりがほの宿もはかなし（詠百首和歌／四季神祇山家）

注

(1) 『藤原定家の研究』（石田吉貞 文雅堂書店 1957）

(2) 外題が『愚秘抄』となっているが内容は『愚秘抄』と『衣笠内府歌難詞』を合綴したものが収められている。

(3) 題簽は『愚秘抄』（残存の字形より判断。島津氏も同様の考えである。）となっているが内容は『三五記』と『衣笠内府歌難詞』を合綴したものが収められている。

(4) 冷泉家時雨亭叢書『歌学集 書目集』に収められている『衣笠内府歌難詞』解題にて島津忠夫氏も同様の指摘をしている。

(5) 『衣笠内府歌難詞』は親本である冷泉家時雨亭文庫蔵『衣笠内府歌難詞』影印を使用する。また、和歌に関しては断りがなにかぎり『新編 国歌大観CD-ROM版』を使用する。網掛けや傍線部は私に付す。

(6) 『日本歌学大系 別巻三』（久曾神昇 風間書房 1964）より引用。

(7) 新編日本古典文学全集八七『歌論集』（橋本不美男ら 小学館 2002）より引用。

(8) 『源氏物語』における「くかほ」表現については、「源氏のことば―『……顔』について―」（清水婦久子『日本文学』19

- 85)、『一種』『一顔』という表現をめぐって―源氏物語の造語法からみて―『源氏物語の展望 第四卷』(神谷かをる 三弥井書店 2008)、『中古・源氏物語・栄花物語の「く顔(がほ)」をめぐって』『学習院大学上代文学研究』第三十九号(白井清子 2014)がある。
- (9) 「中古・中世における「く顔(がほ)」の語構成と語法について」『文芸研究』第一二四集(漆谷広樹 日本文芸研究会 1990)。
- (10) 『中世の抒情』内「西行の四季歌における感情内容」(糸賀きみ江 笠間書院 1979。初出は『共立女子短期大学紀要』第七号 1963)や『西行の「うかれ出づる心」について』『新古今歌人の研究』(久保田淳 東大出版会 1973。初出は『国語と国文学』42・1965)。
- (11) 『西行の和歌の世界』(稲田利徳 笠間叢書 笠間書院 2004)。
- (12) 『西行の和歌の世界』において、「西行の和歌の表現(一)―「くがほ」をめぐって―」(稲田利徳『中世文学研究』71981)が収められている。また、『西行の和歌の世界』において「既発表論文を本書に収めるに際しては、全体との統一をはかるため、補訂、削除を加えた。さらに逐一指示はしていないが、論文によっては、その後見出した資料や用例を加味して、かなり書き改めたものもある。」と「所収論文所収一覧」には記されているが、この論文に関しては、「かほ」表現の数は変更されていない。
- (13) 似ている組み合わせとして、『現存和歌六帖』「ゆふひさすをかべのまつしたつつじときわきがほにはなさきにけり」(つじ／七一九／為家)がある。
- (14) 「くがほ」表現は和歌のみではなく定家以前の、歌論書や歌合判詞にも散見される。本来は、こうした表現にも言及すべきだが既に多くの言及があり、そちらに譲り、今後の課題としたい。例えば、『歌論歌学集成第十卷』の『井蛙抄』「なにがほ」の補注一八において校注者である小林強氏・小林大輔氏は、「かほ」表現の使用について述べている。
- (15) 『中世の文学 歌論集(一)』内『衣笠内府歌難詞』の頭注。
- (16) 定家が『内裏名所百首』において重要な役割を果たしていることは、「定家の名所歌―内裏名所百首を中心として―」(田中初恵『中世文学』三二号 中世文学会 1987)や『後鳥羽院とその周辺』(田村柳吉 笠間書院 1998)などでも指摘されている。

- (17) 田村氏は『後鳥羽院とその周辺』（『明月記』の本文を国書刊行本に拠り、今川文雄氏『訓読明月記』において「前宮内」と記された家隆」としている。しかし、本稿で使用する『翻刻 明月記二 自 承元元年／至 嘉禄二年』においては当該箇所を一条兼良抄出『明月記 歌道事』（京都大学附属図書館蔵 中院通勝写 中院IV一六五）により、「前宮内行能」としている。これについては京都大学図書館電子版にて確認をした。さらに、『明月記』建保三年九月十三日の条において、「予・宮内卿・丹波前司知家朝臣・少納言信定朝臣追参在座」とあることから九月十三日と九月二十三日では「前丹波」は共に知家である。よって、十日の間に官位の変更があったとは考え難いため、「宮内卿」と「前宮内」は別の人物を指すと考え、「宮内卿」は家隆を指し、「前宮内」は行能であると判断する。また、『内裏名所百首』冒頭にある作者十二名を挙げている箇所においても、「宮内卿藤原家隆」と「前丹波守藤原知家」とあることからこの判断は明らかである。
- (18) 冷泉家時雨亭叢書別巻三『翻刻 明月記二 自 承元元年／至 嘉禄二年』（朝日新聞社、2014）を使用した。
- (19) 田村柳菴氏（後鳥羽院とその周辺）・赤羽淑氏（西行上人談抄・名所百首和歌聞書）（福武書店 1983）は名所題を進上したと考えられている。
- (20) 『古典文庫』第四九六（森本元子・田村柳壹編 1988）を使用する。和歌は、女房（順徳院の隠名）・行意・定家・家衡・俊成御女・兵衛内侍・家隆・忠定・知家・範宗・行能・康光の順。
- (21) 『日本歌学大系』第一巻（佐佐木信綱 文明社 1940）より引用。
- (22) 『日本歌学大系』第三巻（佐佐木信綱 文明社 1941）より引用。
- (23) 『檀蔭国文学』一二（大阪檀蔭女子大学 1974）。
- (24) 『後鳥羽院とその周辺』において田村柳菴氏は旅人の歌を本歌にしていると指摘しているが深くは考察していない。
- (25) 『訳注 藤原定家全歌集』において久保田淳氏も指摘している。
- (26) (25)に同じ。
- (27) (21)に同じ。
- (28) 『日本歌学大系』第二巻、『和歌初学抄』（佐佐木信綱 文明社 1940）より引用。
- (29) 『日本文学研究』二五（梅光女学院大学日本文学会 1989）。
- (30) ①「景勝四天王院障子和歌」②「内大臣家百首」③「内裏名所百首」④「洞院撰政家百首」にて詠んだことを指す。

- (31) ④筑波嶺の山鳥の尾のます鏡かけて出でたる秋の月影(洞院摂政家百首、秋、月)(続古今・秋上・入集)
- (32) 『萬葉集全歌講義(卷第十三・卷第十四)』第七卷(阿蘇瑞枝・笠間書院 2011)。
- (33) 『内裏名所百首注・疎竹文庫蔵』(京都大学国語国文資料叢書三五 臨川書店 1982)より引用。
- (34) 『古典論叢』第一四号(古典論叢会 1984)。
- (35) 『就実表現文化』第四号(就実大学表現文化学会 2000)。
- (36) 壬二集六七二の本歌や参考歌が万葉集二九九三という意味合いで示されているとは稿者は読み取れなかった。また、松井氏
は『万葉集』の歌番号表示を『新編国歌大観』と同様に(二九九三/二九八一)の二つを記されていると判断し、本稿におい
て、歌番号は二九九三の一つのみを記す。
- (37) 「みむろ」は他に「仁和寺」を指すことがある為、本稿では歌意から「奈良の三室」を示す歌だけを数えた。
- (38) 『歌論集(一)』内『衣笠内府歌難詞』の頭注においても、この白河の関の和歌とは、「白河の関のしるぢのからにしき月に
吹きしく夜はの木がらし」(建保名所百首/秋二十首/白河関陸奥国/五五九)を指すとしている。
- (39) 『無名抄』「頼政の歌、俊恵選ぶこと」において、
建春門女院の殿上の歌合に、関路落葉といふ題に、頼政卿の歌に、
都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散り敷く白河の関
と詠まれて侍りしを、その度この題の歌をあまた詠みて、当日まで思ひ患ひて、俊恵を呼びて見せられければ、「この歌
は、かの能因『秋風ぞ吹く白河の関』といふ歌に似て侍り。(以下略)
とある。

参考資料…翻刻(時雨亭文庫本)及び校異(時雨亭文庫本・宮内庁書陵部本)

〈凡例〉

底本は、冷泉家時雨亭叢書『歌学集 書目集』を使用。校合をする際に、宮内庁書陵部本(久保田淳氏翻刻『歌論集(一)』中世
の文学)内『衣笠内府歌詞』を使用した。

「一」が頁の変わり目。頁ごとに異同をまとめ、番号を付して、「(時雨亭文庫本)ー(宮内庁書陵部本)」の順番で記した。丁数

は、冷泉家時雨亭叢書『歌学集書目集』に合わせた。

(各種記号について)

* 一般的な割書きと同じ位置にあるが、右側だけに位置し、字の大きさは他の本文と相違ない。

▼ 本文上、他の字面と異にする箇所。各頁の校異の後に詳細を述べる。

■ 欠字

〈翻刻〉

衣笠内府哥難詞中納言入道殿

奥山の谷の杉生の朝あけにひとりきゝつる時鳥哉^①

朝曙を七文字に詠之時あさけの風はとよみ候實

正の字はあさあけに候此詞猶三字に詠てあ

字書加候時七字は八字に成候はきゝよく候此あ

字を五字に仕候事^②頗不甘心給候

五月雨にわたるあさせもなかりけりみなふち山の谷川の水

みなふち山の谷其謂候名所頗不庶幾候

なかれいつる浦山河のおちあひにひかたすくなき五月雨の比

浦山川^③雖安程事候三代集^④の^⑤外詞^⑥頗立耳歌^⑦」(三三才)

① 哉—かな ② 事—支 ③ 浦山河—浦山川 ④ の—之 ▼ 「の」に「」が引かれている。

わか物かほ * 此詞自他雖非不詠事候打解詞候

つかねを * 束緒 雖古今哥詞頗無品物候

おくのえひすのはなれしま 夷嶋疎遠候

粟田口大納言基良卿許被注遣之草

近年諸人上手名譽之輩遍好詠候一様

風情述盡候時自身同詠之候

亡父不許候事

三代集已下古哥之▼三句を取渡て用自哥

事同題同心殊禁制候 一(三三ウ)

▼「句」という字の上から「三」という字を書き直している。指摘はないが、書陵部本も同じ。

万葉集三代集古哥長哥旋頭等之詞頗其

難可淺之由申候き每人雖詠之少々

覚悟事

家隆卿

はつせ山うつろはむとや桜花色かはり行峯の白雲

春霞たなひく山のさくら花

範定卿

さひしさに柴おりくふる山里も身より思ひの煙やはたつ

如此類候

又非上手之輩偏取近代傍輩哥之

一両句用之 一(三四オ)

①覚悟―覺語 ②春霞―はるがすみ ③さひしさに―さびしさは ④柴おり―柴をり

松を時雨の染かねて 秋ゆく人の袖を見よ

た、秋の風 今や衣をうつの山

かならず人をまつとなけれど

昨日の雲 まとをの衣
如比等事候

或世許而不為難或人忘而受用之
猶僻案く者不甘心候

名所百首哥之時與家隆卿内談事書札

若評定も候は、自他存知大切候

「(三四ウ)
①松―杵 ②時雨―しぐれ ③見よ―みよ

あまのかく山 いつかは時をわすれ草

此事堅固不覚候必可承候

②さか木とりかけしみむろのますか、み

見及たる心地もし候はず

海橋立に

くちせぬ松やましくらと候ははしくら

にてそ候らん仕たりと存候哥もいけて

たひ候人候らはねはさてやみ候也

はつせめは

初五字に心浮すかたやうに候よもきぬに
「(三五オ)

①不覚―不覺 ②さか木―さかき

すそなとひく程の品秩にては候はしと

くちをしく候へともつくるゆふはなを

ならずゆふへのと申てしつのをた

まきとはむかしをいまにとや思ひ候はんと
達摩心は思入ておほえ候也

てそめのいとはかうちめか物にて候へは
さらぬ物^①をたにて^②にとる心なればまして
絲などはより候けむと河内の山に思ひ
よりたるを人のめ見せよかしと存候也
そかひにたにもとはなんそと候はゝいか
してたまはり候へし 一(三三五ウ)

①物—もの ②て—手

非官絃者か中間のことのねそのことゝなく
候らんをたえのはしなと申候候へはその候^①
事となけれど箏のなと申たくてすゝ
ろ事を申候

ふなはしこかれわたるはくらはし山と
おほえてにくゝ候へとも奮哥の心ならて
すへきやうなくて構出たりと存候
妻奴未出關 鳳皇池上月

送我過商山 一(三三六オ)

①事—亘 ▼候—ナシ (汚れなのか「候」か判別し難い)

この景氣の無術身にしみて覚候^①
あまりありあけの月のさやの中山は

るいともよもぎこえ候はし

この有明の月をは作者すこし思入て候

よしなき人の哥▼のおほく見候て少々は

それをさへさり候つる程におほくの哥はすてゝ候ぬ

御製若所望得候は、可進に候

*裏書先度草に春廿首の廿首の字を

さほとこの事もそらにおほえ候てかすへて

か、んと思ひて不書候しを其定に 「(三六ウ)

① 覚—覚 ② 哥—うた ▼「の」に「\」が引かれている。指摘はないが、書陵部本も同じ。

あそはし候にけるとおほえ候こそ

片腹痛候へあまりものかおほえ候

はてかすへて後に書具て候也

① 白河關と 御詠にも能因法しか

候はぬこそうれしく候へ

② 秋風そ吹白雲の關 みをさかのほる

③ うかひ舟まつ此世にもいかゝくるしき

あまりに弟子を多もちて見たくも

候はぬと 「(三七オ)

① 白河—白川 ② 秋風—秋かぜ ③ うかひ舟—うかひぶね ④ 此世—此よ

うるせく人の弟子は仕候その

存候ゆへに身のくるしくてし

へく候な

咳病無術候て乍臥申候此百首を

きと見候はん料に青侍に令書寫候を

侍候程御使を置て候遅筆之候間

又々書付候也

以中納入道殿自筆本令書寫了

「(三七ウ)

A Study on Sensationes of Language in “*Kinugasanaihuutanaji*”

Chiho Yamamoto

“*Kinugasanaihuutanaji*” written by Teika Fujiwara is comprised of three works. Each of the works has different contents and constructions because they were sent to different people, but there is one thing that these works have in common: Teika criticized and questioned, based on examples. It is worth focusing on points Teika pointed out in terms of phrases and vocabularies.

In this paper, I examine Teika’s sensationes of language, based on points Teika pointed out. In particular, on the basis of comments about “*kaho*” expressions, “*Amanokaguyama*” and “*Mimuroyama*”, I scrutinize “*Syugusou*” in order to clarify the vocabulary and the source of inspiration of words that Teika had.

Consequently, I have obtained the two following results:

1. Teika told people to restrict the use of words which exceeds his or her levels of poems.
2. Teika tended to praise the poems that he could not come up with. Especially, the tendency is stronger when the poems involve the words from “*Manyoushu*”.